

▼平田院長プロフィール
 大分上野丘高校から川崎医科大学へ進学。昭和六十二年に同大を卒業後、大分医科大学大現大分大医学部第二外科へ入局。国立長崎中央病院、大分中村病院、厚生連

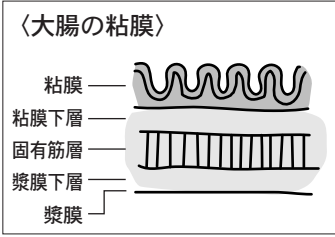


ひらた医院

院長 平田孝浩

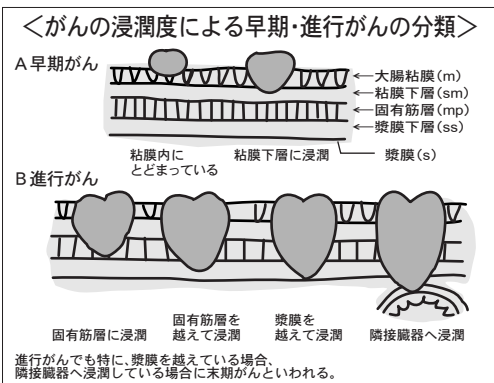
HP <http://www.hirataiin.com/>
 E-mail: info@hirataiin.com

大腸がんを撲滅しよう



「大腸がん撲滅キャンペーン」を知っていますか？
 大腸がんは、国内の死者数がこの二十年で二倍以上にも増え続け、現代女性のがん死原因の一位となっています。さらに、二〇一五年には男女を合わせた日本人のがん罹患率の一位になると予想されています。
 この大腸がんは、早期発見できればほぼ完治できる病気であるのに関わらず、初期の段階にはほとんど自覚症状がなく、大腸がん検診未受診の人が多いため死亡率も増加していくと考えられています。

大腸がんは、食生活の欧米化した日本では増加傾向にあります。大腸がんには直腸がんと結腸がんがありますが、特に結腸がんが急速に増加しています。動物性脂肪を摂取すると、消化を助けるために胆汁酸が多く分泌されます。脂肪の消化の際に必要なものの中に発がん物質があり、大腸の粘膜にがんが発生すると考えられています。



大腸の内側は粘膜で覆われ、その下は四つの層で構成されています。大腸にできるポリープの一つで、腺腫とよばれる良性の腫瘍が粘膜にできることがあります。大腸がんの多くは、このポリープが深く関係しているといわれています。粘膜から直接発生する平坦型やかん陥凹型のがんもありますが、発生の経緯は分かっています。

40歳になったら定期健診を心がけましょう

大腸を観察する場合には、肛門から挿入する内視鏡を用います。長いスコープで大腸全域を観察することができ、大腸は曲がりくねっているため胃に比べて挿入方法は少し複雑ですが、小腸の手前まで挿入可能です。さらに、大腸内視鏡の

具を用いてポリープ切除や組織採取ができます。粘膜内にとどまっている場合は内視鏡で切除できますが、進行がんになると開腹手術が必要となります。大腸がんの大部分は潰瘍限局型（潰瘍のようなもの）で、その周りにがんが防波堤のようにできるため、多くは腺管形成の盛んな高分化型腺癌です。リンパ節転移も比較的少なく手術後の成績も比較的良好です。

しかし、開腹手術をするとなると入院しなくてはなりませんし、仕事や日常生活に支障を来たしてしまいます。そうなる前に内視鏡で切除をしてしまう方が簡単ですし、体に及ぼす影響も少なく済みます。

がんは進行すると自覚症状があらわれます。早期がん発見は治療の可能性と生存率を高めますが、そのためには自覚症状があらわれる前から定期的な健診を受けることが大切です。